

Q11

「過敏性反応」とは なんですか？

過敏性反応とは、生体内に投与された異物に対する生体の防御システムが過剰あるいは不適當に反応して発現するために生じる様々な症状の総称です。過敏性反応には、アレルギー反応とインフュージョン・リアクション（輸注反応）があり、似たような症状が起こりますが、その発生機序が異なるとされています。

アレルギー反応とは、薬物投与開始後数分から数十分で起こる急性の反応と、24時間～数日後に症状が起こる遅発性の反応があります。抗がん剤による過敏性反応のほとんどが薬剤自体あるいは添加物によって惹起される急性の反応です。

アレルギー反応のなかには、重篤な場合は急激な血圧低下を伴う危険な状態（アナフィラキシー）に陥るものもあります。アナフィラキシーとは、過敏性反応の最も重篤な状態で、原因物質の投与から、早ければ数十秒後、多くは5～10分以内に出現する比較的急性の全身反応のことをいい、発現が早いほど重篤である場合が多く注意が必要です。

アレルギー反応に注意を要する主な抗がん剤としては、タキサン

製剤（パクリタキセル、ドセタキセル）やプラチナ製剤（カルボプラチン、オキサリプラチン、シスプラチン）、リポソーム化ドキソルビシン（商品名ドキシル）、エトポシド、L-アスパラギナーゼ、ブレオマイシンなどがあります。

アレルギー反応が起こる場合の多くは初回投与時ですが、プラチナ製剤は過敏性反応の発現機序が異なるため、6～8サイクル以降で発症リスクが高まるという特徴があります。

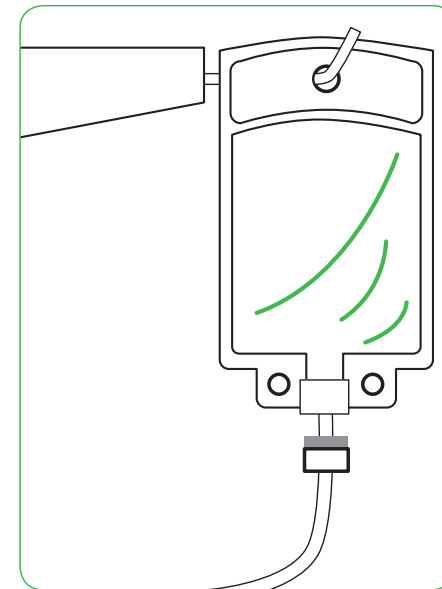
また、インフュージョン・リアクション（輸注反応）とは、薬剤に対する過敏反応のひとつですが、リツキシマブ（悪性リンパ腫のCD20抗原に対するモノクローナル抗体、商品名リツキサン）やトラスツズマブ（乳癌のHER2[ヒト上皮細胞増殖因子受容体2型]に対するモノクローナル抗体、商品名ハーセプチン）などの薬物投与中もしくは投与開始後24時間以内に多く現れる、分子標的治療薬の有害反応の総称です。

近年開発された悪性腫瘍に対する治療薬としてのモノクローナル抗体は、従来の抗がん剤とは異なった機序で作用する分子標的薬剤で、これらの薬剤が治療に用いられるようになり、これまでと異なった過敏反応が出現しており、主に輸注に伴うものであることからインフュージョン・リアクション（輸注反応）といわれています。インフュージョン・リアクション（輸注反応）の発生機序は明らかではありませんが、マウスの異種タンパクが含まれていることや、腫瘍細胞の急速な崩壊によって産生、放出される物質などが炎症、アレルギー反応を引き起こすことが原因となっていると推測されています。

過敏性反応の主な初期症状として、くしゃみ、咳、熱感、蕁麻疹、そうよう搔痒感、こうちよう顔面紅潮、口唇浮腫、咽頭不快感、息切れ、呼吸困難感などの症状があり、対応が遅れると重篤化することがあります。そのため薬剤投与中に「体が急に痒くなってきた」、「立て続けにくしゃみが出始めた」、「のどがイガイガする」、「鼻が急に詰まってきた」などそれまでと異なる症状があるような場合、「おかしい」、「何か違う」と思うような場合などにはすぐにコールしていただくことが重要です。

これらの症状は通常軽微～中等度ですが、重篤な症状となるとアナフィラキシー様症状（低血圧、血管浮腫、ふしゆ低酸素血症）、肺障害（気管支けいれん、間質性肺炎、アレルギー性肺炎、閉塞性細気管支炎、肺浸潤、きゅうせいこきゅうそくはくしょうこうぐん急性呼吸促迫症候群）、心障害（心筋梗塞、心房細動、心原生ショック）などがあり、重篤な症状による死亡例も報告されています。しかし、症状が出現しても軽微なものであれば、点滴の速度を遅らせることにより問題なく薬剤投与を終了することができます。治療前に、主治医や看護師から説明があることと思いますが、点滴の最中に何か具合がおかしいと感じたら、すぐにコールしていただくことが重要です。

（大山高廣）



[参考文献]

- 1) 中川靖章：医学のあゆみ、安全管理の重要点 総論、医歯薬出版2013
- 2) 中根実：がんエマージェンシー、化学療法の有害反応と緊急症への対応、医学書院2016
- 3) 日本がん看護学会監修：オンコロジックエマージェンシー、医学書院2016